



天空の都・チベットを
訪ねて 前編

長嶺胃腸科内外科医院
長嶺 信夫

大丈夫なの！生きて帰ってこれるの！

これは、私がチベット旅行することを知人に話した時返ってきた言葉である。

今年（2010年）8月11日から17日までの一週間チベットに行ってきた。2年前にチベット・トレッキングを計画していたものの、2008年3月に発生した暴動のため、外国人のチベット入国が全面禁止になり、やむなく旅行を諦めていたのであるが、昨年ダライ・ラマ法王を沖縄に招聘することができたので、別の観点でチベットの現状を見てきたいと考えたからである。

現在でも、チベットへの個人旅行は不可能で、旅行社を利用したツアーでなければ、入域許可が下りない状況である。

私のチベット旅行を知った多くの人達が「大丈夫なの！」「生きて、帰ってこれるの！」と心配顔であった。中国ではダライ・ラマの写真を持っているだけで拘束される。私も、ダライ・ラマ法王の件があるので、きっとブラックリストに載っていて、入国を拒否されるのではないかとの不安があった。チベット入域には特別に「チベット自治区入域許可証」（写真1）

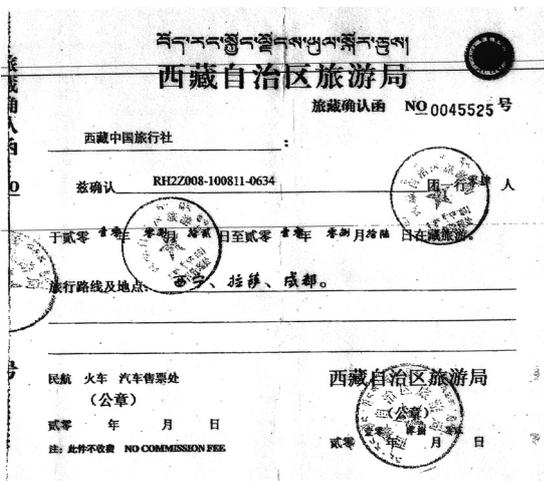


写真1. チベット自治区入域許可証。許可証なしで入域すると拘束される。

を得る必要があり、その可否は中国政府がにぎっていたからである。

青藏鉄道について

チベット自治区のラサに入るのは、四川省の成都経由の飛行機が便利であるが、ダライ・ラマ法王の出生地であるアムド（青海省）地方の現状や西寧からラサまでの青藏鉄道沿いの開発やチベット人の生活状態を見るため、時間はかかるものの西寧からラサまでは鉄路（青藏鉄道）を選ぶことにした。

青藏鉄道は青海省の省都西寧から同省西モンゴル族自治州ゴルムドまでの第1期工事（814キロ）が1979年に完成、第2期工事として2001年にゴルムドからラサまでを着工し、完工予定を1年前倒しし、2006年7月から旅客運送がなされている世界で最も高地を走る列車として有名である。第2期工事（1,142キロ）はゴルムドを前線基地として建設が進められ、最高地点のタングラ峠は海拔5,072m、その近くの唐古拉駅も5,068mに位置する。酸素が希薄な高原や永久凍土での工事は想像を絶する困難をともなったことであろう。それにもかかわらず、完工予定1年前のわずか5年間で完工したのは、脅威であり、現在の中国の経済力や卓越した技術力を示している。

青藏鉄道は中国にとっては、まさにチベットへの物流、および漢民族移動、軍用列車の交通網の完成であるが、チベットにとっては、中国のチベット侵略の象徴であり、またチベットの自然破壊、豊かな地下資源の略奪・搬出路である（写真2）。



写真2. 青藏鉄道沿いを走る青藏公路、西寧とラサ間の大動脈である。

旅行出発直前の8月8日未明に土石流が発生し、多くの犠牲者がでた甘粛省甘南チベット族自治州舟曲県は青海省と四川省に接する地域であり、西寧の南東部にある。舟曲県は人口13万人余りのうち約3分の1がチベット族で、標高は平均1,800メートル、最も高い山岳地帯では4,000メートルを越し、温暖な気候であるが豪雨による洪水や土砂崩れが度々起こり、この原因の一つが中国のチベット侵略後に行われた森林の大量伐採であるといわれている。

ダライ・ラマ法王日本代表部事務所が編集した「約束の庭 ノルブリンカ 中国侵略下のチベット 50年」(2009年風彩社発行)には、「中国が1985年までに甘粛省甘南から切り出した木材は644万立方メートルにおよび、もしこれを直径30センチメートル、長さ3メートルの丸太にして縦に並べると地球を2回りする計算になる」という。その上、チベット高原における天然林の回復は極めて限られていて「勾配が急であること、土壌が乾燥していること、気温の日較差がかなり大きいこと、地表面が高温になることにより、チベット高原の森林再生には70年から100年の歳月がかかり、そのため、森林伐採によってもたらされる破壊的な影響は回復できない」と記載している。

公安警察について

中国では入国時は勿論のこと、国内を移動する都度、パスポートや身分証明書の提示を要する。北京で1泊後、西寧行きの飛行機搭乗時は勿論、西寧から青蔵列車に乗るときも、パスポートの提示と荷物検査がなされ、駅の待合室は乗客以外入れない。待合室には制服公安警察以外に私服の公安(チベット人ガイドが教えてくれた)がいて目を光らせていた。

4時間遅れの列車に乗車後、早速検札があり、紙製の乗車券が席番号を印刷されたプラスチック製のカードと交換された。すでに夜中の12時である。

翌朝、健康チェックの用紙が配られた。高山病チェックの名目であるが、記入欄には住所、氏名、生年月日、自宅の電話番号記載欄もある。実際は身元調査票であろう。しばらくして用紙

の回収があった。昼過ぎになって1人の公安警察が来て「誰のInvitationですか?」と訊いてきた。当方はInvitation(招待)?・・・まさか、ダライ・ラマの招待と言うわけにもいかない。相手の公安は携帯に質問を英語で書き訊いてきたが、当方もしどろもどろである。公安は諦めて帰っていった。これですんだと思っていたら、今度は3人がかりでやってきた。このとき「チベット入域許可証を示せばいいのだ」と思いつき、許可証を提示するとうなずいて帰っていった。これですべてのチェックが済んだと思っていると、ラサ到着前の午後9時40分に車掌が部屋を訪ね、前夜渡したプラスチック製のカードと紙製の切符を再度交換すると言う。記念品と思っていたカードをあわてて取り出し、渡すと「このグループのリーダーは?」と訊いてきた。「リーダーはいない。ガイドも乗車していない」と言う。「ガイドなしではラサに入れない」と言う。あらためて入域許可証を提示すると、「出口で切符と入域許可証を提示するように」と言い帰っていった。2重、3重のチェック体制であった。

ラサのチベット人女性ガイド

ラサ駅では幸運にもチベット人の女性ガイドが待っていた。「女神」を意味する名前の浅黒い目鼻立ちが整った女性であった。ホテルに着く間に手短かに注意事項の説明があった。「今夜は高山病対策で、風呂やシャワーを使わず、窓を開けて休むこと。明日からの観光ではフィルムを没収されることがあるので、公安警察や武装警察に向けて写真を撮らないこと」などである。ラサは標高3,650メートルに位置し、高山病のおそれがある。ヒマラヤのホテルで熱いシャワーを浴びた直後、高山病で倒れた人のことを聞いたことがある。しかし、北京を前日朝出発し、その夜は夜行列車、2日間もシャワーを浴びていない。私はもともと血の気が多く(皆がそう言う)、その上、赤血球過多である。この程度の高度では問題ない。注意を無視してシャワーを浴び、窓を開け、床についた。

後編は、12月号へつづく。

奄美大島紀行 その2

牧港泌尿器科
金城 勤

二泊目はホテルに宿泊し、夕食に外へ出ると、ホテルの通りでトラックの上をステージにして、人だかりができていた。近づく「ヤンコ祭り」という商店街のお祭りだった。演歌のメロディに合わせたおばさん達の踊り、司会をしていたラップグループの歌、店の宣伝も兼ねているのだろう、スナック従業員のワイド節の踊りなど、雑多だが見ていて楽しく、ついつい引き込まれてしまった。外人男性のギターで女の子二人がボーカルのグループは、ハイサイおじさんを「ヤンコ祭り、ヤンコ祭り」と替え歌で歌っていた。そのグループが最後に歌った「花」には独特の味わいがあり、寂びの部分の「泣きなさーい」に外人男性のガラガラ声が入ってきた時には、ちょっとだけ鳥肌が立った。

ヤンコの意味を隣のおじさんに聞くと、立っていた通りの名前とのこと。このおじさんちょっと聞かれただけなのに、私のために、協賛していた地酒メーカーの振る舞い酒を取ってきてくれた。堅いPTA役員からクレームがつきそうな出し物もあって、これらの出し物を子どもからお年寄りまで楽しんでいる姿は、ある意味異様でもあったが、郷愁感とでもいうのか、心が和ませられた時間であった。

後ろ髪を引かれながらその場を後にして、「鳥しん」という居酒屋に向かい、名物の鶏飯をいただいた。地元の兄ちゃん達が多くいて、ここへ来るまでに酒が入っていたせいか、すぐに隣のグループとうちとけて話が弾んだ。Y君という方は子供の頃に相撲の日本一になったらいい。今は私より小さいくらいだが、耳がつぶれていて、相撲が強かったのは本当らしい。他にも体重三桁はゆうにあって近大相撲部だったという人もいて、途中から、相撲の話だけになった。以前に「奄美相撲少年」という特番を見

た事があったが、やはりここでの相撲人気は本物らしい。横綱「朝潮」を輩出した伝統が、脈々と受け継がれているのだろう。

その後、この日会ったばかりだというのに、鳥しんの主人に誘われてスナック2軒に行くこととなり、奄美のお姉さん達を相手にしながらカラオケもそうとう歌った。

奄美大島の人は想像していた以上に人懐っこく、ウチナンチュの私に親切であった。なにか自分が幼い頃に日常的に感じていた空気を蘇らせてくれた。

本土の人の言う、「癒しの島」沖縄、「人が優しい」沖縄は本当だろうか。すでに過去のものではないのか。そう形容される風情はどちらかというと奄美の人の方に残っているのではなかろうか。

医療事情で言うと、救急搬送の際に自衛隊機にお願いせざる負えない状況は、沖縄も奄美群島も同様である。搬送後に病状が落ち着いた後、奄美の人からは搬送してくれた方にお礼の連絡が入るが、沖縄の人からはほとんど無いらしい。イデオロギーはともかく、事実だとしたら寂しい思いがする。

追伸：奄美大島で気づいた小さなこと

- ・沖縄と同じように、子供が生まれると名前が書かれたのし紙のようなものを壁に貼るようだ。
- ・ゲアバを「ばんしろろ」と人名のように読んでいた。バンシルーのことか。
- ・新聞には死亡を知らせる欄があったが、名前の載せ方は名刺状で、沖縄のように家族の内情までわかる一覧みたいなのは一部だった。
- ・お墓は全部大和墓だった。与論島では一部にウチナー墓を見ることもあったのだが。
- ・現在の家屋は屋根の稜にくびれがある日本家屋だ。

帰路に乗船した、大島運輸、A-lineは那覇港入港直前、汽笛が鳴った後に「涙そうそう」が流れる。東シナ海を背に、まさに沖縄に着かんとする時に、甲板にこの曲の前奏が流れ、私はこみ上げてくるものを抑えられなかった記憶がある。本当に名曲である。